

実践報告

3 年次学士編入 5 期生との災害看護勉強会の取り組み —授業時間数不足問題解決への一案—

田中 加苗

Disaster Nursing Study Sessions Led by 5th Class of Third-year Undergraduate Students of the Accelerated Bachelor of Science in Nursing (ABSN) Program —A Suggestion to Solve the Problem of Insufficient Class Hours—

Kanae TANAKA

〔Abstract〕

Third-year undergraduate students of the Accelerated Bachelor of Science in Nursing (ABSN) program at our university are not allowed to take the required elective subject “Nursing Seminar (Disaster Nursing),” so they do not have the opportunity to systematically learn disaster nursing on campus. In this situation, volunteer members of the 5th class of ABSN students held disaster nursing study sessions throughout the year in 2022, and a full-time faculty of the ABSN program assisted in planning and conducting the sessions. The study sessions were led by the students with a total of 10 meetings over 12 months, starting with deciding which topics all students wanted to study. The sessions were conducted based on an interactive style where some students presented what they had researched and the questions were discussed among all the students. Student feedback showed that they realized an acquisition of broad knowledge and an increase in the number of peers who share similar aspirations through the sessions. However, the sessions did not result in students acquiring practical disaster nursing skills. These study sessions have also been held by the 6th class students in 2023. The faculty will continuously help students improve their disaster nursing practice skills by listening to the students.

〔Key words〕 Accelerated Bachelor of Science in Nursing (ABSN) program, Disaster nursing, Student-led, Study session

〔要 旨〕

本学の3年次学士編入生は選択必修科目「看護ゼミナール（災害看護）」を履修できないため、学内では体系的に災害看護を学ぶ機会がない。そのような中、学士編入5期生の有志メンバーが2022年度に災害看護勉強会を通年開催し、学士編入専任教員が会の企画運営を支援した。勉強会は学生主体とし、学びたいテーマを全員で決めるところから始め、12か月で計10回開催された。学生自らが調べてきたことを発表し、疑問点を議論しあう参加型スタイルで実施された。参加学生からのフィードバックより、勉強会によって幅広い知識と志を共にする仲間が増えた実感があった一方で、災害看護実践能力獲得には至らなかったことがわかった。勉強会は2023年度も6期生により開催されており、今後も学生の声を聴きながら災害看護実践能力向上にも貢献できるようサポートしていく。

〔キーワードズ〕 学士編入生、災害看護、学生主体、勉強会

I. はじめに

報告者は本学の3年次学士編入生専任教員かつ災害看護の専門家として、2022年度に編入生主体の災害看護勉強会開催を支援した。この経験を振り返り記録し、災害看護教育のあり方について示唆を得ることを目的として報告する。

勉強会開催に至った核となる理由は、報告者が日々学士編入生と関わるなかで、彼らの潜在的な災害看護学学習ニーズを感じたためである。本学では2011年度より選択科目「看護提供システムⅡ」にて災害看護が体系的に教授されるようになり¹⁾、現在は「看護ゼミナール（災害看護）」が開講されている。しかし当該科目は2022年度時点において4年制課程学生のみ履修可能であり、学士編入生は履修できない仕組みであった。このような中で、報告者が大学院で災害看護学を専攻していたことを知る学士編入生から、「将来人道支援の現場で精神保健がしたいが卒後はクリティカル領域配属を希望した方がよいか」「将来災害現場で活躍したいがどの病院に就職するとよいか」といったキャリアパス関連の相談が時折寄せられてきた。災害看護とは「災害が及ぼす生命（いのち）や健康生活への被害を極力少なくし、生活する力を整えられるようにする活動」と定義されており²⁾、災害直後だけでなく、年単位での中長期スパンでの災害の影響を受ける人々への看護支援が含まれる。しかし、DMAT（災害派遣医療チームDisaster Medical Assistance Team）などの緊急医療支援団体のイメージが学生のなかで先行し、災害看護イコール災害直後の人命救助という理解の傾向があるように思われた。報告者は都度、災害看護の対象の幅広さを説明しキャリアパスについて助言してきたが、学士編入生にも災害看護を体系的に学ぶ機会があれば、もう少し広い視野でキャリアパスを描けるのではないかと感じていた。そのような折に、相談元の学士編入3年生（当時）に、勉強会という形で仲間と災害看護を学習するのはどうかと提案したところ、是非やりたいと話がまとまったことが、開催のきっかけであった。

災害看護学を学生のうちに学ぶことは、災害時の実践能力の向上にも寄与する。災害時は医療ニーズが急激に高まることで医療資源が枯渇し、ニーズに対応しきれないところに実践の困難さがある。そのため災害時は、資格取得前の医療系学生も医療資源の一員として何らか役割を担うことが期待される場合がある。実際に国内では、災害発生後の看護学生の支援活動として、ごみや家財の搬出、泥かきといった生活支援ボランティアや³⁾、避難所内での健康教育、アロママッサージ、足浴、健康観察などの健康支援ボランティアの実践が報告されており⁴⁾、看護学生の6割が今後の被災地ボランティア活動を希望しているという報告もある⁵⁾。教育現場では、

2009年度の看護基礎教育カリキュラム改正で統合分野が新設され、災害看護が履修科目となったことを機に、独立科目を開講するなど何らかの形で災害看護を教授している教育機関が、カリキュラム改正前の38.1%（455課程中176課程）⁶⁾から、2014年時点には97.4%（351課程中342課程）⁷⁾に激増した。以上のような社会的ニーズの高まりや基礎教育の潮流があることから、本学の学士編入生についても他の多くの看護学生と同等に災害看護学について学習する機会をもち、災害看護実践能力を少しでも醸成して卒業することをサポートする必要があると言える。

国内外における災害看護基礎教育の3大課題は、災害看護経験のある専任教員の不足、授業時間数不足、演習内容の検討の必要性である^{7)~9)}。本学編入生が直面し、解決しようとした課題はまさに2点目の授業時間数不足である。悩ましい授業時間数不足問題を解決するための一案として、今回の学生との取り組みの内容や成果を公表し、さらに災害看護教育のあり方について考察したい。

〔倫理的配慮〕個人が特定されない範囲で活動内容とアンケート結果を公表すること、公表は災害看護学発展に寄与することが目的であって学生らの学習内容を非難することが目的ではないこと、公表に同意しなくても不利益を被ることはないこと等を、勉強会参加メンバーに対し勉強会終了時点で説明し同意を得た。

II. 活動の概要

勉強会メンバーは、学士編入5期生（4年生）30名のうち希望者9名（内リーダー役1名）で、アドバイザー役割の教員（報告者）が1名ついた。学士編入生の過密なスケジュールに配慮して、当該年度の活動は学士編入4年生に限ること、学生の自主性に基づく活動であること、メインの学業に支障がないと思う範囲での準備および参加で良いことを会の方針にすることを教員からリーダー役学生に提案し、それに同意した学生が集まった。メンバーの中には、社会人経験がある者、国内被災地でボランティア活動経験がある者、看護以外の医療資格を保有している者などが含まれた。

初回の活動（2022年3月）は、事前に募った各学生の関心のあるテーマから、類似するテーマを希望する者同士でグループになり、大体の開催スケジュールを組むことから始まった。学生が希望したテーマとしては、【災害時の看護師の役割】（4月）【災害超急性期の医療】（4月）【災害時のメンタルヘルス（看護師含む）】（5月）【トラウマケア、グリーフケア】（5月）といった基盤的なことから、【災害時の倫理的ジレンマ】（7月）【社会的弱者の防災、避難所対応】（9月）などアドバンスな内容も含まれた。他には、国際看護、人道支援に関心のあ

る学生も多かったため、【日本でできる国際看護】【日本にいる外国人への災害時支援】【日本にいる難民の現状】(いずれも11月)といったテーマも学生が希望した。アドバイザー役の教員からは、災害看護学の導入として【災害の定義、災害サイクル、災害に関する法令】(4月)を最初に入れること、そして学生の興味関心をより深められるように、【災害看護におけるリーダーシップ】【災害支援活動のグローバルスタンダードな考え方】の回(6月)を提案し担当を申し出た。加えて、学生が国試準備で多忙な時期には【災害看護学領域に特化した国試対策】(1月)を、就職直前の実践力をつけて欲しい時期には【災害直後の病棟看護シミュレーション】(2月)を企画した。さらに、学生からの希望もあり、災害現場や人道支援現場の実践イメージを持てるように、災害看護実践経験が豊富なゲストを学外から招いて交流する機会も2回設けた(表1)。

会は学生の限られた空き時間と教員の予定があう平日日中で調整し、1回あたり60分～90分として、およそ月に1回のペースで計10回開催された。学生の都合にあわせて、対面もしくはWeb会議システムを利用した。当日のテーマ担当の学生ら(回によってはアドバイザー役教員)が運営を担い、事前に調べ学習をしまとめたものをプレゼンテーションした後、参加者全員でディスカッションする時間が設けられた。教員は、実際の現場の様子や災害

看護領域での共通認識を伝えたりして、学生の疑問点を解決したり、議論が促されるようにフォローした。

Ⅲ. 勉強会での学生の反応

各回の参加者は7名前後であった。すべての担当学生がプレゼンテーション用に10枚程度のパワーポイントスライドを準備し、クイズを出したり、簡単な事例検討を入れたりと参加型の資料を作成していた。

会では、密な関係性がすでに築けている学士編入生の特徴をいかした、深いディスカッションが展開された。例えば、【社会的弱者の防災、避難所対応】(9月)の回では、担当の学生が「災害時の避難所生活では、LGBTQといった性的マイノリティの方も要支援の対象だ」という問題意識を持っており、「みんなだったら避難所でどう支援するか」と投げかけたところ、メンバーから「力になりたいと思う反面、無意識に差別的で不快な思いをさせている場合もあるので、必ず言ってほしいと正直に話すのはどうか」「LGBTQというカテゴリーでひとくくりにするより、それぞれのニーズがあると考えるべきではないか」「こちらが看護職とわかるようにしているだけで話しやすいかもしれない」などの多角的で実践的な意見が出た。あるいは、【災害時のトラウマケア、グリーフケア】(5月)の回では、担当学生が「トラウマを解決して

表1 実施した勉強会のテーマ一覧 ★は報告者が主担当 ◎は演習スタイル

時期	テーマ
3月	キックオフミーティング
4月	・災害の定義、災害サイクル、災害に関する法令★ ・災害時の看護師の役割 ・災害超急性期の医療
5月	・災害時のメンタルヘルス ・トラウマケア、グリーフケア、看護師のストレスケア
6月	・災害看護におけるリーダーシップ★ ・災害時に使えるグローバルスタンダードな考え方★
7月	・災害時の倫理的ジレンマ
8月	(夏期休暇期間のため休会)
9月	・社会的弱者(妊産婦、性的マイノリティ、在宅療養者)の防災、避難所対応 ・ゲストスピーカー会①「東日本大震災直後の看護支援活動」
10月	(実習期間のため休会)
11月	・日本でできる国際看護、日本にいる外国人への災害時支援 ・日本にいる難民の現状
12月	(卒論期間のため休会)
1月	・災害看護学領域に特化した国試対策★
2月	・災害直後の病棟看護シミュレーション★◎
3月	・ゲストスピーカー会②「途上国、難民キャンプ等での看護活動」

いくにはやはり人に話すと良いのではないかと自分はあるが、みんなはどうか」と問いかけたことで、メンバー各々が過去のつらい体験について振り返り、人によっては他者に語りづらいことがある、しかし語ることで良いこともある、といった涙ながらの議論になった。そして別の担当学生が「この先看護職になる者としてこの機会に自分の死生観を深めたい」と言って各々の死生観を共有するような流れとなった。

唯一の演習回となった【災害直後の病棟看護シミュレーション】(2月)は、教員が企画運営を担当した。学生が大地震が起こった直後の病棟にいるスタッフナースになりきり、トイレが使用できなくなって患者が困っている等の状況設定に対してどう行動するかを机上で考え発表しあう内容である。演習後には、「演習を通じて、冷静に判断することの難しさを実感した」「専門職だからといって感情を押し殺す必要もないのかな、患者さんや避難者と一緒に感情を出し合って乗り越えれば良いと思った」「応援を呼んだり、周囲の人と意見交換しながら試行錯誤すれば良いんだと気付かされた」「医療者自身も被災者であるし家族もいるから、使命感だけではなくて医療者の心もケアし合ったり家族との時間を確保することも災害時には特に必要だ」といった感想が寄せられた。状況が切迫するなかで看護師としていかに患者と自身の心身の安全を守るのか、優先順位をつけて倫理的な看護を実践するのかに対する難しさを感じつつも、周囲の人と協働することや、事前の準備が不可欠であることに気づいたと言える。

東日本大震災直後の外部支援者としての看護活動について話を聞くことができた【ゲストスピーカー会①】(9月)では、「災害看護に対する具体的なイメージがついた」「災害看護の幅広さと無限大さを改めて痛感した」「実際に自分自身で被災地を訪れて体感し、問題意識を持ち研究を重ねることが効果的な災害支援に繋がるのだと感じた」「自分の最大限の力を発揮しながら積極的に動ける人になりたい」などの感想が得られた。学生たちが災害現場を疑似体験し、自分の目指すロールモデルを得た体験であったと言える。

1月に実施した【災害看護学領域に特化した国試対策】では、過去に出題された災害看護学領域の問題をカテゴリに分けて出題の傾向と知識の確認を一緒に行った。時間中は参加学生にクイズ形式で過去問を出題したが、学生は概ね正答できていた。ただしその根拠については理解が曖昧であるという課題にも学生は気づいていた。

IV. 活動後の学生による振り返り結果

1年間の勉強会活動が終了したタイミングで、メンバーに活動に対するフィードバックを得る目的で無記名

のアンケート協力を依頼し、5名より回答が得られた。下記に概要をまとめる。

まず、勉強会に参加して良かったと感じていることとしては、「自分が感じていたり考えている災害看護の問題や課題をみんなで考えることで、引き出しが増えた」「自分の興味のなかった視点や知識が、他者からの発表・共有により得られたことで、災害看護の理解が1人で勉強するよりも、広く、深く得られたように思う」「参加型で勉強できてよかった。災害看護のスペシャリストから学ぶことができて新たな知見が広がった」「将来災害看護の現場で一緒に働くかもしれない仲間ができたこと、実践的・理論的なことを学べたこと、授業では学べない学生自身が知りたいことについて探求できたこと」といった回答が得られた。次に勉強会で印象に残っていることは、「ゲストスピーカーのお話。現地に行かないサポートも重要であり、また、スポットライトが当たりにくいけど、そんな役割も災害時の支援でできることとしてあるのだと改めて学べた」「一見、災害に関係がなさそうな社会情勢や人権、環境問題も災害医療や看護に深く関わっていることを学び、盲点だったなあと痛感するとともに、こうした問題にも自分なりに向き合おうと思えたこと」等であった。総じて、勉強会によって幅広い知識と志を共にする仲間が増えた実感はあり、問題意識を持つきっかけにもなっていたと言える。一方で実践力が付いたことを実感しているような回答は無かった。

勉強会の改善点については、「特になし。月一はとてもちょうどよかった」という意見もある一方で、「欲を言えば、もっと時間にゆとりを持ってみんなとディスカッションを楽しみたかった」「3年次から勉強会に参加できると、より深く多様な学びができたのかなと思いますが、現実的に厳しいかもしれない」といった意見もあった。やはり忙しい中でそれぞれに工夫しながら参加していたことが窺え、月に1回、60分～90分の実施は学生らにとって限界の負荷であり現実的な開催頻度であったと言える。

V. 本活動からの示唆と今後の課題

1. 災害看護の学び方の可能性

参加学生たちは過密スケジュールの中、複数の資料を閲覧しながらスライドを念入りに作成しており、時折アドバイザー役教員より補足説明することはあったが、少なくとも誤った内容を伝えているということは皆無であった。学び方が身に着いている編入生の特徴が活かされた学習方法であったと言える。そして参加学生は、1学年30人という少人数制で1年間学習してきた深い関係性であること、忙しい中でも自主的に勉強したいと申し出るほどモチベーションが高いといった特徴があった。

このような学生とであったため、特に問題なく学生主体の運営スタイルで終えることができた。また、通年で自由参加という緩やかなスケジュールリングが一定の参加率を保ち学生の学習ニーズを満たすことに繋がったと考えられる。

勉強会では、学生同士の活発な議論も印象的であった。災害看護領域では、通常の看護場面とは異なる切迫した状況で選択を迫られるジレンマに陥ったり、普段関わらないような他職種との協働が求められたりすることがある。そのため周囲と相談しながら最善策を導くコミュニケーション力が必要な能力の一つである。学生たちが、一つの問題について多様な意見を出し合ったり、シミュレーションを通して周囲と協力して活動する必要性を感じていたことから、学生たちの良好な関係性をいかした学び方が、学生の災害時特有の課題について議論する力を向上させ、資源が枯渇する中でコミュニケーションを取りながらチームで最善策を導く実践能力の育成に貢献したと考えられる。

2. 災害看護の学び方の課題

1) 知識的側面

勉強会の成果として、勉強会中の学生の反応やアンケートの記述から言えることは、学生にとっては災害看護に関する知識がほぼ無かった状況から各段に変化した実感があり、実際【災害看護学領域に特化した国試対策】(1月)の回でも概ね学生は正答できていた。しかし、成績とは関係ない活動であることもあり、学生らの知識の正確さ、深さ、勉強会前後の知識の変化がどの程度であるかは確認できていない。本報告のような手法が学生にとって効果的な学習方法であるかの根拠づけとして、今後はその効果を何等かの方法で可視化していくことで、災害看護教育に貢献すると考える。

2) 実践能力の側面

災害時に地域住民が看護系大学に期待することの一つに「発災後の学生の活躍」がある¹⁰⁾。看護学生は発災時に自分で自分の心身の安全を確保するだけでなく、地域住民のためにできることを考え、実現できるだけの能力を獲得しておく必要があると言える。

災害看護実践能力の具体的指針としては、国際看護師協会が2019年に公開した「災害看護コアコンピテンシー2.0版」(以下、ICN 2.0版)がある¹¹⁾。このICN 2.0版において災害看護コアコンピテンシーは〔備えと計画立案／コミュニケーション／危機管理体制／安全と安心／アセスメント／介入／復旧／法と倫理〕の8領域かつ、各領域3～6のコンピテンシーから構成される。修得レベルは3段階で、看護学生や看護師の中でも災害対応を日常的に行っていない人はレベルIである。ここで学生の

勉強会中の発言を振り返ると、【社会的弱者の防災、避難所対応】(9月)の回では「領域1. 備えと計画立案」のコンピテンシー「I. 1.4災害の際に要配慮者を収容する方法を説明する」にあたる発表内容や発言があり、【災害直後の病棟看護シミュレーション】(2月)の回では「領域4. 安心と安全」のコンピテンシー「I. 4.1災害においては、通常あるいは厳しい環境のいずれであっても自分と他者の安全を守る」などに該当する発言があった。今回の学生からのアンケートの記述には、学んだ知識を使って実践できそうだと手応えを感じていると読み取れる意見は見られなかったが、ICN2.0版を参照すると部分的には実践能力がついていると分析可能である。この客観的事実をフィードバックすることで、学生に実践能力の獲得を実感してもらえる可能性がある。

一方でいわゆる看護師が直接対象に触れて変化をもたらしていく「領域6. 介入」に該当する意見は勉強会中の発言からもアンケート記述からもほとんど見られなかった。この点が学生自身も実践能力の向上を実感できていなかったことに影響している可能性がある。この領域の能力が十分に醸成できなかった理由の1つとして、全10回の勉強会において演習が1回しか実施できなかったことが考えられる。知識基盤を築くことに時間をかけたことと、学生主体の方針を優先し教員主導の演習は取り入れることは憚られたためである。理想としては、机上でできる避難所運営ゲーム¹²⁾や地域の災害対策マップ作り¹³⁾といった災害時支援をイメージできる演習や地域防災に取り組む演習を今後取り入れられるとよい。しかしこのような演習の準備には時間がかかる。月に1回の開催でちょうど良かったという負担感の学生自らが演習準備運営を担当するには、より高いモチベーションと長いスパンでのスケジュールリングが必要である。あるいは比較的準備時間を必要としない三角巾包帯法や段ボールベッドの組み立てといった内容で実践力を上げることで「領域6. 介入」の実践能力向上に貢献する可能性がある。

3) 勉強会自体の方向性

本勉強会は2023年度も学士編入6期生主体で継続実施されている。2022年度と同様に災害看護の基礎的知識から会は開始となったが、自分たちで災害前後に活用できるアプリ開発をしたいと具体案を出したり、学生としての発災時の行動を明確にしたいと学生用アクションカードの作成を提案したりと、学んだことを形にしていこうと動きまわっている。この6期生の取り組みは学生自らが第17回聖ルカ・アカデミアにて発表した。

会としては、本活動は学士編入4年生のみの集まりであることや、学士編入生は2年間で卒業してしまうことによる継続性や発展性の限界はある。また、2022年度の

勉強会では、学生の興味関心の傾向から国際的な話題に時間を割いた一方で、復興などの中長期的テーマや原子力災害について学習、議論する機会がなかったことも課題であった。災害看護学の学習範囲は広く、すべてを網羅することは通常の科目内学修でも困難であり、学生が関心のあるテーマから問題意識を明確にして、自身で今後も学習を深めていくことが期待される。いずれにしても今後も学生の声を聴きながら何らかの形で継続し、学生のニーズと社会のニーズ双方にマッチした内容になっていくように学生をサポートしていくことが必要と考える。

謝 辞

災害看護基礎教育の発展のために、勉強会の活動内容公開、アンケートへの回答を快諾してくださった勉強会メンバーの皆さまに感謝します。

本報告の一部は日本災害看護学会第25回年次大会にて発表した。本報告に関して開示すべきCOI関係にある企業等はない。

文 献

- 1) 中村綾子, 井部俊子, 倉岡有美子ほか. 看護提供システムⅡにおける災害看護教育の試み. 聖路加看護大学紀要. 2012;38:44-51.
- 2) 日本災害看護学会. 災害看護関連用語 災害看護 [Internet]. <http://words.jsdn.gr.jp/words-detail.asp?id=20> [参照2023-10-18]
- 3) 新沼剛, 及川真一, 佐藤紘子ほか. 秋田県豪雨災害における日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学赤十字防災ボランティアステーションの取り組みと課題. 日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要. 2017;22:87-94.
- 4) 吉見萌々, 石元菜南子, 葛目裕人ほか. 被災地避難所において看護学生に必要とされる看護援助技術. 高知大学看護学会誌. 2019;13(1):41-52.
- 5) 板垣喜代子, 矢嶋和江, 北林司ほか. 東日本大震災後の災害被災者支援に関する学生の意識調査. 弘前医療福祉大学紀要. 2013;4(1):49-53.
- 6) 兵庫県立大学大学院看護学研究科. 21世紀COEプログラム「ユビキタス社会における災害看護拠点の形成」2年間活動報告書平成15年度—16年度. 兵庫: 兵庫県立大学災害看護拠点; 2005. p. 467-8.
- 7) 佐藤美佳. 看護基礎教育における災害看護に関する教育体制の現状と課題—全国実態調査から—. 日本災害看護学会誌. 2021;22(3):85-98.
- 8) 関谷まり. 看護専門学校における災害看護の授業実態と教員の災害看護教育への考え方—看護教員を対象としたアンケート調査から—. 日本災害看護学会誌. 2015;16(3):32-42.
- 9) Littleton-Kearney, MT, Slepski, LA. Directions for disaster nursing education in the United States. Crit Care Nurs Clin North Am. 2008;20(1):103-9.
- 10) 渡邊和信, 酒井太一. 災害発生時に近隣住民が看護系大学に希望することは何か. 順天堂大学保健看護学部順天堂保健看護研究. 2021;9:23-32.
- 11) International Council of Nurses. Core Competencies in Disaster Nursing Version2.0; 2019/兵庫県立大学地域ケア開発研究所 (訳). 災害看護コアコンピテンシー2.0版; 2022[Internet]. https://www.u-hyogo.ac.jp/careken/_src/65907196/ICN_disaster-Comp2.0_JP.pdf?v=1686203861393 [参照2023-08-01]
- 12) 永井智子, 吉田千文, 竹内美幸ほか. 住民と協働して実施した地域の災害対策に関する授業の実践. 聖路加国際大学紀要. 2020;6:64-69.
- 13) 谷口千枝, 佐藤晶子, 奥野友紀ほか. 看護学生に対する地域での災害対策マップ作り演習の教育効果. 日本災害看護学会誌. 2019;20(3):3-13.